KUMAMOTO ROSAI MAGAZINE
Rosai 病院通信
September
Vol. 55
2022

令和4年度
診療科・部門のご案内

呼吸器内科／消化器内科／脳神経内科／糖尿病・代謝内科／循環器内科／循環器足壊疽外来／腎臓内科／アレルギー外来／小児科／脳神経外科／血管内科／血管外科／心臓血管外科／形成外科／消化器外科／一般外科／乳腺外科／呼吸器外科／整形外科／小児外科／移植外科／皮膚科／泌尿器科／産婦人科／耳鼻咽喉科／放射線科／麻酔科／眼科／リウマチ内科／リウマチ・膠原病内科／リハビリテーション科／病理診断科／臨床研修医／看護部／薬剤部／中央リハビリテーション部／中央放射線部／中央検査部／栄養管理部・栄養管理室／中央臨床工学部／入退院支援センター／地域医療連携部・地域医療連携室

● 挨拶　院長 猪股裕紀洋
● 副院長／院長補佐紹介

ご挨拶

院長　猪股（いのまた）　裕紀洋（ゆきひろ）

令和4年度初めてのRosai病院通信をお届けいたします。夏を過ぎて秋になっての、ようやくの発刊をお詫び申し上げます。言い訳に過ぎませんが、発刊を前にして院内クラスターや発熱外来の沸騰に見舞われ、かくも遅れてしまいました。

本年度も、以前勤務されていたかたも含めて、たくさんの新任・転任医師をお迎えしています。副院長として、熊本赤十字病院から福松之敦先生（産婦人科部長）、に加わっていただきました。また部長職には、福松先生のほか、城野皮膚科部長、井上消化器外科部長も新任となります。研修医は今年もフルマッチで8名が入り、研修に燃えつつ発熱外来などでも活躍しています。事務局長、事務局次長もそろって新任となりました。各診療科部門の顔ぶれは本冊子でご確認ください。

オミクロンによる第七波は、熊本県ではこれまでの「北から」と異なり、県南に位置する八代で早く始まりました。当院でも7月初旬から急激な感染状況の悪化がみられ、最盛期には同時に3カ所のクラスターが発生するなど、患者様、近隣医療機関、さらには行政にも多大なご迷惑、御心配をおかけしました。外来も入院も、まだゼロにはほど遠いですが、9月になって急速に沈静化しつつあります。この間、全数把握の取りやめ、療養観察期間の短縮など、国の施策にも大きな変化があり、またワクチン施策もめまぐるしく変わり、当院として追いつくのがやっという場面もあります。多くの陽性患者様の入院をお受けして、約2ヶ月間、1つの病棟全体を陽性患者用に用いることにより、一般患者様の入院がかなり窮屈になることもありました。医療圏外からも含めて、コロナ陽性妊婦さんの分娩もこれまでに無く多く扱いました。今までに無い感染の広がりで出産を控えた妊婦さんの感染も多かったことと、陽性妊婦さんの取り扱い施設が少なく、新聞紙上でその課題が取り上げられることもありました。一般に、陽性妊婦さんの分娩は、エアゾル発生のリスクから帝王切開によることが多く、今年度になってからの当院の分娩は全体の半数以上が帝王切開となっていることも、コロナ感染の影響です。

そのような中ですが、診療体制はこれまで以上に充実し、全人的な医療としてできるだけ欠落のない体制をとっています。昨年度から外来精神科が無くなりましたが、平成病院の本田院長や、熊本大学精神科竹林教授等のご尽力により、入院患者さんに対するリエゾン精神科は非常勤医師によってしっかり維持されています。従来整形外科が中心となって診療を行ってきたリウマチ疾患は、新たに山村先生のご着任で、大学から派遣いただいている膠原病内科の坂田先生と分業で、新しい内科的治療が広がっているリウマチ診療の底上げをしてくださっています。救急医療の維持発展は当然ですが、がんの集学的治療についても各科で協働して系統的な機能アップを図っています。私の属する外科でも、乳がん、肝胆膵領域の難治性がんなどの診療が拡充されています。

ハード面の老朽化が大きな課題ですが、そのような中でも患者様のご意見なども活かしながら、掲示物や院内表示など、あるいはトイレや手術時のご家族待合室など、改善改修を少しずつ進めていきたいと思います。また、まもなく院内全体の WiFiもようやく整備予定で、通信上の利便性が向上いたします。もう半分が過ぎつつありますが、本年度も、患者様中心の医療からぶれずに、さらならる診療機能の維持発展に邁進していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

理念

良質で信頼される医療の実践

基本方針

1　地域の人々と働く人々に寄り添い、その健康と尊厳を守ります。
2　地域医療機関と連携し、急性期医療を担う中核施設として全人的医療に貢献します。
3　いつでも受け入れられる救急医療、災害医療を実践します。
4　人にやさしく優れた医療人を育成します。
5　病院の理念実現のための健全な経営基盤を確立します。

患者の権利

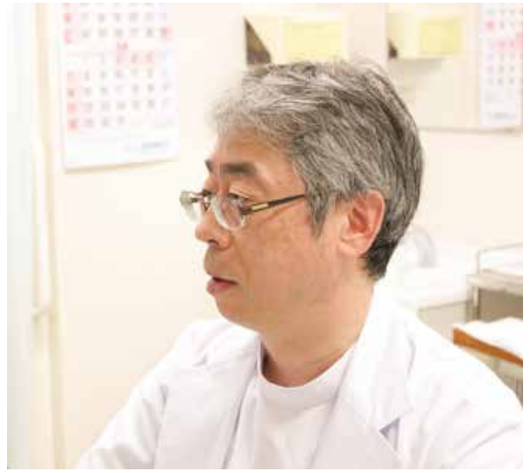
1　全ての患者さまが良質で安全な医療を平等に受けることができます。
2　自身の病気や医療内容について、十分な説明を受けることができます。
3　詳しい説明を受け十分に理解した上で、検査や治療方法を自身で選ぶことができます。また、当院での治療計画を他院の医師に相談することができます（セカンドオピニオン）。
4　医療上得られた個人情報などのプライバシーは、法的あるいは治療上などの正当な要請のある場合を除き、保護されます。
5　手続きに則り、自身の医療上の記録や情報の開示を求めることができます。

患者の責務

1　自身の病状や健康に関する情報を詳しく正確に伝えてください。
2　社会的ルールを遵守し、自身と他の患者さまと共に良質な医療を受けることができるよう、病院の規則、職員の指示を守ってください。

幹部紹介

副院長



池田　天史（いけだ　たかし）

（兼脊椎センター長）（救急・災害医療担当）
（医事業務担当）

佐々木　雅人（ささき　まさと）

（兼内科部長）（兼消化器内科部長）（兼肝疾患センター長）
（兼入院・外来診療部統括部長）（兼健康診断部長）
（医療安全管理室長）（薬事、治験、倫理担当）

副院長

松村　敏幸（まつむら　としゆき）

（兼治療就労両立支援部長）（兼地域医療連携室長）
（兼労災疾病研究室長）（兼熊本労災看護専門学校長）
（兼臨床研修センター長）（教育・研修担当）

福松　之敦（ふくまつ　ゆきとし）

（兼産婦人科部長）
（兼地域医療連携副室長）

院長補佐

等　泰之（ひとし　やすゆき）

脳神経外科部長
（兼勤労者脳卒中センター長）

金子　健吾（かねこ　けんご）

糖尿病・代謝内科部長
（兼栄養管理部長）

飯坂　正義（いいざか　まさよし）

一般外科部長
（兼救急・災害診療部長）

荒木　裕至（あらき　ゆうし）

放射線科部長
（兼中央診療部統括部長）
（兼医療情報部長）

増田　聖子（ますだ　まさこ）

耳鼻咽喉科部長

山根　宏美（やまね　ひろみ）

第二呼吸器内科部長

宮崎　眞一（みやざき　しんいち）

整形外科部長
（兼関節外科部長）

呼吸器内科

安道　誠（あんどう まこと）

呼吸器内科部長
（兼感染制御部長）（兼アスベスト疾患センター長）
日本呼吸器学会指導医、
日本内科学会総合内科専門医・指導医

山根　宏美（やまね ひろみ）

第二呼吸器内科部長
日本呼吸器学会専門医、
日本内科学会総合内科専門医・指導医

丸山　広高（まるやま ひろたか）

腫瘍内科部長
（兼がん総合診療センター長）
（兼化学療法センター長）
日本呼吸器学会専門医、
日本内科学会総合内科専門医

中山　剛（なかやま ごう）

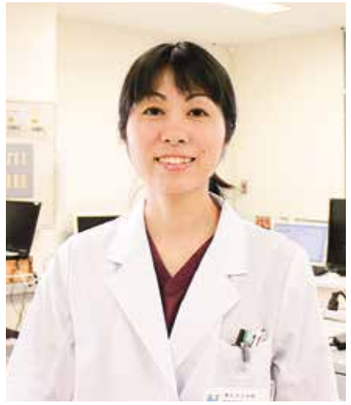
呼吸器内科副部長
日本内科学会認定医

清水　ゆかり（しみず）

呼吸器内科医師
日本内科学会認定医

川口　紘矢（かわぐち ひろや）

呼吸器内科医師
日本内科学会認定医



内藤　大貴（ないとう だいき）

呼吸器内科医師

鍬崎　恵里子（くわさき えりこ）

呼吸器内科医師
日本内科認定医、
日本呼吸器学会専門医

井村　昭彦（いむら あきひこ）

呼吸器内科医師

4月から中山剛医師、井村昭彦医師が着任し、８名体制で診療を行っています。熊本県南呼吸器内科の拠点病院として、入院患者数は２００１年度４０３名から２０１９年度１２３９名と3倍に増加しています。呼吸器感染症、肺癌、気管支喘息、慢性閉塞性肺疾患、間質性肺炎など呼吸器疾患全般と不明熱やその他の感染症疾患など、地域医療機関からの紹介・救急患者に対応しています。２０１９年度の入院内訳では肺炎・胸膜炎などの感染症が５６８名(45.8%)と最も多く、高齢化社会を反映して高齢者の嚥下性肺炎の救急受診が多くを占め、経口摂取の可否に関しては、耳鼻咽喉科での嚥下評価、ＳＴによる嚥下リハビリを共同して行っています。肺癌は手術非適応例でも化学療法の進歩で延命効果も高くなり、入院から外来に移行しての化学療法も積極的に行なっており、２０１９年度の入院は３３６名から３１９名（２５.７%）と若干減少しています。呼吸器外科も常勤体制で肺癌だけでなく、膿胸、気胸など協力して診療に当たっています。気管支喘息・肺気腫などの閉塞性肺疾患の入院は、感染合併による急性増悪が殆どで救急受診や他院からの紹介入院です。間質性肺炎は原因によって治療法や予後が大きく異なり専門性が要求される分野ですが、特発性・膠原病関連肺炎・薬剤性肺炎等も含めて１０２名（８.２%）とやや増加傾向です。また、２０１６年の熊本地震において閉鎖した八代市立病院の結核に代わって、２０１９年１２月当院に結核患者収容モデル事業に基づいた前室付きの陰圧室２床が完成し肺結核や新型コロナ感染症などの収容が可能となりました。特殊外来として、職業性肺疾患、特にじん肺、アスベスト関連疾患に関しては数少ない専門医療機関として、診断や手帳検診等で県外からも広く患者様の紹介を受け入れアドバイスや労災疾病申請の援助などを行っています。

消化器内科

この原稿を書いている令和４年３月は、オミクロン株による第６波の新規感染者は全国的には減少しつつありますが、全体的に下げ止まっている状況です。２月には当院内の患者様と職員の感染が確認されたため、２日間の救急外来受け入れ中止を余儀なくされ、緊急性の低い内視鏡検査は延期や中止をしました。現在は院内での感染はありませんが、新入院や内視鏡検査前に全例に行っているＰＣＲ検査では、時折無症状の陽性者が見られています。入院患者数も一時激減しましたが、蔓延防止法重点措置解除後は急速に増加し満床に近い状況です。

現在、当科は7人体制ですが、令和４年度には２年間勤務してくれた黒岩朋裕先生が熊本地域医療センターに異動となり、３年前まで当院に勤務された水田馨先生が県北医療センターから戻って来られる予定です。黒岩先生は明るいキャラクターの若者ですが、意外と（?）まじめで、仕事はきちんとしていてカルテも誰が読んでも分かりやすく記載されています。コミュニケーションをとるのがうまく、素直なので誰からも好かれて頼られる存在でした。元同級生の日隈先生との漫才のようなやり取りが面白く、見られなくなるのが残念です。千代永内視鏡科部長のもとでたくさんの経験を積まれたので自信を持って送り出せます。その他中堅として池邊賢一副部長、市川亮副部長、日隈ゆかり先生、米田暁先生がおられ、毎日忙しくも和気藹々の雰囲気で診療に当たっています。

千代永先生、池邊先生は出身が八代ですが、胆膵系が専門ですので胆管結石や癌、膵癌の患者さんが多くなっています。市川先生の出身は水俣ですが、当院にすでに6年勤務されており何でもこなせ、特に殆どのＥＳＤを担当されて最近は後輩の指導されるようになりました。当院に来られて結婚されて子供さんも生まれ、最近自宅も建てられました。文字通り消化器内科の中核で、当科に不可欠なDrです。日隈先生もお母様が八代出身だとか。ママさんＤｒですが、仕事はフル勤務で当院の女医さんたちの中でも一番仕事されているうちの一人です。美人で、いつもまわりに笑いの絶えないムードメーカーです。米田先生は当院の栄養課室長の甥に当たられるので、八代にゆかりがあります。要領は良くありませんが真面目で一生懸命な性格です。夜遅くまで病院に残って週末も病院に来られています。考え過ぎるところがあって、一人で悩んでいるところが私の若い頃に似ている気がするので、ほって置けない感じです。今年初めての子供さんができてパパになられました。４月には八代に引っ越される予定、これからは早く仕事を終えて自宅に帰るようにと願っています。また、これまでに引き続いて熊大から園田先生と具嶋先生に火曜日午後、交替で胃透視やESD、ERCPなどご指導頂いています。

当科では、消化管系は千代永先生、池邊先生が胆膵専門のため、ERCPや超音波内視など胆膵系の検査・治療が増加しています。今年は、院長先生のご厚意でSpy-Glassという胆管処置具を購入していただきました。閉塞性黄疸や胆嚢炎におけるPTCDやPTGBDも行っています。通常・緊急の上下部内視鏡検査の他、NBI・拡大内視鏡、上下部消化管ESD、小腸/カプセル内視鏡、ＣＴコロノグラフィー、食道胃静脈瘤治療（透視下EIS、EVL）、胃瘻造設・交換などは通常業務として行っています。また、外科、放射線科と共に肝臓専門外来を毎日行っており、「肝疾患センター」を運営しています。すべての肝疾患を扱っていますが、B/C型肝炎のコントロールがほぼ完全に可能となった現在、院内外での掘り起こし・啓発活動、継続的なフォローアップに力を入れて、肝癌を早期発見し、手術・ラジオ波・TACEによる治療につなげています。さらに肝癌に対するソラフェニブ、レンバチニブ治療のほか、免疫チェックポイント阻害剤の新薬アテゾリズマブ+ベバシズマブ併用、ラムシルマブ、レゴラフェニブ、カボメティクスなど最新の治療を行っています。消化器外科医のほか移植外科の林田信太郎先生、小児外科の大矢雄希先生など、若いながら猪股先生のもとで豊富な経験を積まれたＤｒがおられるので肝切除は安心です。

治癒切除困難な悪性腫瘍も増えていますが、病棟消化器カンファレンス、外科・放射線科・病理との合同カンファレンス、ＨＣＣカンファレンス、キャンサーボードにて多角的な目で治療方針を決定しています。ポート造設して外来化学療法を積極的に導入しています。熊本メディカルネットワークに参加、拡大して近隣の医療・介護施設との情報共有に力を入れています。

当院の院長は猪股裕紀洋先生ですが、ご存じのように元々は小児移植外科がご専門です。熊大では病院長まで勤められました。当時私の後輩の若いDrが、書いた論文の査読を緊張して猪股病院長お願いしに行くと、すぐに読まれて丁寧にペンを入れて返されたと感激して話してくれた事があります。偉ぶらず、子供の先生ですから本当に優しく、それはすべての患者様に対しても同様です。これまで、手抜きのできない生死をさまよう小さな子供たちの診療に数多く当たってこられ、本当にシビアな状況を経験してこられたと伺っています。コロナで最近は渡航できなくなりましたが、ベトナム戦争の枯葉剤による先天的な影響を受けた子供達の手術に、週末を利用して行かれる事もたびたびでした。そのためだと思いますが、重い病気を抱えた患者さんや、病気の子供たち、社会的な弱者に対してのまなざしと対応は本当に暖かく、毎日一番近くで見ている私にとっては、医療の原点を常に意識させられる存在です。日頃は寡黙な先生ですが、物事の本質を見抜いて穏やかに指摘されます。私が知っている医師としては最も尊敬できる臨床医で、そのもとで仕事ができる事に喜びを感じています。当院の多くの職員も同じだと思います。当院もそろそろ建て替えを考えなければならない古い病棟もありますが、医療の本質は建物ではなく、患者さんたちに対する真摯な医療態度であることをいつも教えられている気がします。

今年も８名の基幹型研修医を受け入れる予定です。やる気のある研修医には積極的に手技を教えて直接診療に参加させています。当院での研修を希望する研修医は毎年非常に多く、マッチングのための面接も大変ですが、何より患者さんを大事にする院長先生の診療姿勢と、各科の垣根が非常に低く和気あいあいとした仲の良い雰囲気を評価してくれての事と思います。

新型コロナの終息はまだ見えませんが、New normalな生活を実践しながら、医療人として何が一番大事な事かを見つめて、みんなで仲良く前向きに頑張っていきましょう。

佐々木（ささき） 雅人（まさと）

副院長（兼内科部長）（兼消化器内科部長）（兼肝疾患センター長）（兼入院・外来診療部統括部長）（兼健康診断部長）（医療安全管理室長）（薬事、治験、倫理担当）

日本消化器病学会指導医、
日本肝臓学会暫定指導医、
日本消化器内視鏡学会専門医

千代永（ちよなが） 卓（すぐる）

内視鏡科部長

日本消化器病学会専門医、
日本消化器内視鏡学会専門医

池邊（いけべ） 賢一（けんいち）

消化器内科副部長

日本消化器病学会専門医

市川（いちかわ） 亮（りょう）

消化器内科副部長

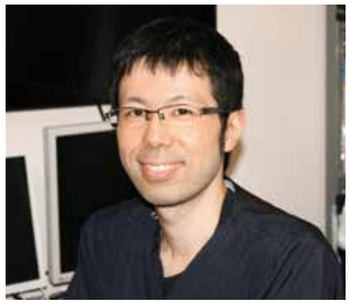
日本消化器病学会専門医、
日本消化器内視鏡学会専門医、
日本肝臓学会専門医

日隈（ひのくま） ゆかり

消化器内科医師

水田（みずた） 馨（かおり）

消化器内科医師

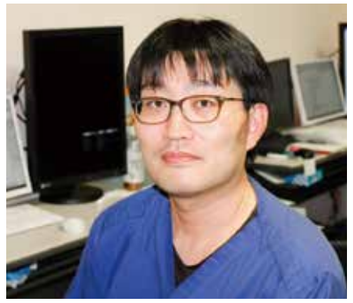


米田（よねだ） 暁（あきら）

消化器内科医師

園田（そのだ） 隆賀（たかよし）

非常勤医師（毎週火曜日午後）



具嶋（ぐしま） 亮介（りょうすけ）

非常勤医師（毎週火曜日午後）

脳神経内科

脳神経内科では神経変性疾患や神経難病から頭痛やしびれ、ふるえといった日常よくみられる症状にまで、幅広く専門的治療を行っております。また、脳神経外科、リハビリテーション科と共に脳卒中センターを構成し、脳梗塞急性期の診断・治療・リハビリ・再発予防を行っています。

地域の先生方からご紹介いただいた患者様につきましては、当科で専門的診断を行い治療方針が決定した後は可能な限り紹介元で治療を継続していただくよう病診連携を図っていきたいと考えています。

はら　やすゆき
原　靖幸

脳神経内科部長
日本頭痛学会指導医、
日本神経学会、
日本脳卒中学会専門医

やまもと　ふみお
山本　文夫

脳神経内科医師
日本神経学会認定医、
日本脳卒中学会認定医

たけうち　ようすけ
竹内　陽介

非常勤医師（毎週金曜日）

糖尿病・代謝内科

主な対象疾患／糖尿病、甲状腺疾患（バセドウ病、橋本病、甲状腺腫瘍など）、内分泌疾患（下垂体、副甲状腺、副腎など）

糖尿病・代謝内科は年々増加の一途を辿る糖尿病を中心とした生活習慣病の診断・治療・教育から、甲状腺機能異常あるいは甲状腺腫瘍をはじめとした内分泌疾患の診断・治療を主に行っています。また、栄養サポートチームの一員として他科入院中の患者様の栄養状態改善や血糖コントロールを積極的に介入することで、術後合併症の減少等にも大きく貢献しております。今年も1名の先生が交代となりましたが、「フットワーク軽く」のモットーは変わらず診療を行っていきたいと思います。

かねこ　けんご
金子　健吾

院長補佐　糖尿病・代謝内科部長
（兼栄養管理部長）
日本糖尿病学会専門医・研修指導医

いわした　しんすけ
岩下　晋輔

第二糖尿病・代謝内科部長
（兼臨床研修センター副センター長）
日本糖尿病学会専門医・研修指導医、
日本内科学会総合内科専門医

さくらい　きみ
櫻井　希美

糖尿病・代謝内科副部長
勤労者医療総合センター医

とくなが　りえ
徳永　理衣

糖尿病・代謝内科医師

さいしょうじ　ふみ
最勝寺　芙美

糖尿病・代謝内科医師

循環器内科

主な対象疾患／心不全、虚血性心疾患（狭心症、急性心筋梗塞など）、心筋症、高血圧、不整脈、弁膜症、末梢血管疾患、高脂血症など

循環器内科はスタッフの異動に伴い、小林貴大先生、石丸雄大先生を迎え、新たな診療体制となりました。私共の使命としております救急患者さんの迅速な受け入れ、的確な診断と治療、地域の先生方とのスムーズかつ充実した連携などを通して、引き続き熊本県南の心蔵および血管を守って参ります。また外来におきましても２診体制を継続し、循環器内科および血管内科を統合した形で心臓ならびに全身の血管疾患に対する診療への包括的な対応を行ってまいります。何か少しでも気になることがありましたらいつでもどうぞご紹介ください。↗

松村　敏幸（まつむら　としゆき）

副院長（兼治療就労両立支援部長）（兼地域医療連携室長）（兼労災疾病研究室長）（兼熊本労災看護専門学校長）（兼臨床研修センター長）（教育・研修担当）

日本循環器学会専門医、日本心血管インターベンション治療学会認定医・指導医、社会医学系指導医

土井　英樹（どい　ひでき）

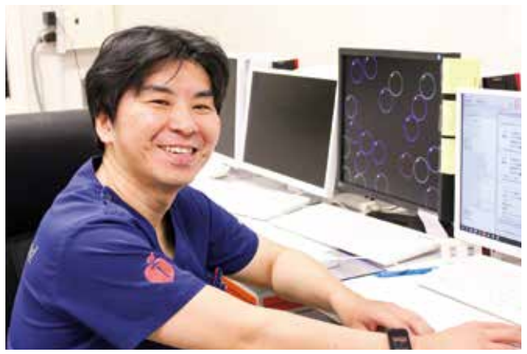
循環器内科部長（兼血管内科部長）

日本循環器学会専門医、
浅大腿動脈ステントグラフト実施医、
日本心血管インターベンション治療学会認定医

阿部　浩二（あべ　こうじ）

第二循環器内科部長
（兼心臓リハビリテーション部長）

日本循環器学会専門医、日本内科学会指導医、
日本内科学会総合内科専門医、
日本心血管インターベンション治療学会専門医



川上　和伸（かわかみ　かずのぶ）

第三循環器内科部長

日本循環器学会専門医、日本不整脈心電学会認定不整脈専門医、日本内科学会総合内科専門医、日本心臓リハビリテーション学会指導士、日本心血管インターベンション治療学会認定医

川上和伸先生をリーダーとする種々の不整脈に対する診療も、地域の先生方のご理解ならびにご協力もあって多くの患者さんをご紹介いただいています。心房細動をはじめとするカテーテルアブレーション治療やペースメーカー治療などによりお元気になれた患者さんから、大変喜んでいただいています。

また昨年から始動しました阿部浩二先生をリーダーとする心臓・血管リハビリテーションが、この春から外来および病棟に心不全療養指導士の資格を有する専任看護師1名を配置し、さらに充実した対応が可能となりました。これまで以上に積極的に入院中から介入して、退院後も可能な限り自分の足で歩ける状態を維持し、また心不全増悪による再入院減少に寄与できるよう取り組んでいきたいと思います。

古川　祥太郎（ふるかわ　しょうたろう）

循環器内科副部長

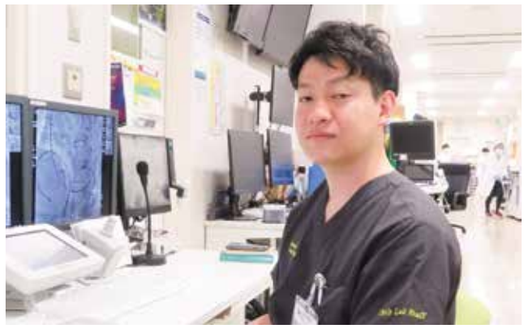
日本内科学会総合内科専門医、
日本心血管インターベンション治療学会認定医、
日本循環器学会専門医、
日本心臓リハビリテーション学会指導士

梅田　美結（うめだ　みゆ）

循環器内科医師

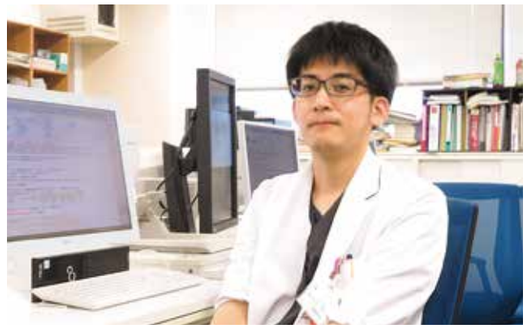
竹尾　政宏（たけお　まさひろ）

循環器内科医師



小林　貴大（こばやし　たかひろ）

循環器内科医師



石丸　雄大（いしまる　たけひろ）

循環器内科医師

循環器足壊疽外来

初めまして、日本形成外科学会専門医・指導医、医学博士の匂坂（さきさか）正信と申します。

宮崎大学の医学部を卒業後、東京大学の形成外科に入局し、その関連施設である杏林大学で波利井清紀教授に師事し、その医局人事で様々な病院で診療を行ってきました。

その中で、糖尿病性足潰瘍、重症下肢虚血、褥瘡などの「難治性創傷」といわれる病気は、東京近郊でさえ専門的に治療を行う医師が少なく、「これは故郷の熊本では困っている患者さん、医師がたくさんいるのではないか」と思いました。そのため、この分野の診療や研究に特に力を入れながら、国立がん研究センター中央病院や山梨大学病院では合計5年間、頭頸部癌、軟部悪性腫瘍、乳房再建などの遊離皮弁移植術による再建手術を専門的に行い、直近では静岡済生会総合病院の形成外科科長を勤めた後に、2021年4月から熊本に戻りました。

重症下肢虚血という、「足に傷ができ、そこに血が通っていないため、傷が治らず壊死していく病気」の治療を行う上で、血の巡りを改善していただける循環器内科医、心臓血管外科医の先生方と協力するのは必須であるため、熊本労災病院の循環器内科の土井英樹先生達とチームを組み、毎週水曜日に「循環器足壊疽外来」として診療を行っています。

出来るだけ残せる組織を温存しながら、同時に感染源となる壊死組織は的確に除去して感染コントロールを行い、最新の創傷治療の手段を用い、最短の治療期間で日常に復帰していただけることを目標に、医師、看護師、義肢装具士の皆さんで一丸となって治療にあたっています。傷の治療と血流の治療を同時進行で、同じ外来ブース内で行える環境が何よりありがたく、最大の強みであると考えています。

また入院が必要な場合も、傷を専門的に診ることができる皮膚排泄ケア認定看護師や、病棟の看護師さん達、循環器内科の先生方と連携して治療を行っています。

局所陰圧閉鎖療法や成長因子、創傷被覆材を用いた最新の治療はもちろん、傷が治った後も再発を予防するための靴やインソールの調整、装具作成、フットケアも行っており、総合的に足病変をフォローアップしていきます。

最近ではカテーテル治療が出来ないような末梢の血管病変をお持ちで、これまでは血流改善をあきらめざるを得なかったような患者さんに対しても、LDLアフェレーシスや遠赤外線治療を組み合わせることで、慢性的な虚血の痛みを軽減させ、創傷を治癒に向かわせることができそうな兆しが見えてきました。

引き続き、あきらめずに患肢の温存に尽力して参りますので、足の傷が治らない症例を抱えていらっしゃる先生方は、何でもご相談下さい。よろしくお願い申し上げます。

匂坂（さきさか）　正信（まさのぶ）

非常勤医師（毎週水曜日）
サキサカ病院
形成外科・美容外科医師

腎臓内科

尿素窒素やクレアチニンの上昇があり、腎機能障害が確認される慢性腎臓病ステージ3以上の患者様は、他科疾患の合併や手術などで容易に腎機能の悪化がみられ、適切な治療を行わなければさらに悪化して尿毒症に至るリスクが増加します。腎臓内科では入院・外来ともにこれらの患者様を管理し、適切な治療が行えるよう努めています。

腎不全が悪化し重篤となる場合には、尿生成が十分に出来ずに体内に水分が貯留する溢水、高カリウム血症、高窒素血症などが問題になります。腎臓内科外来は、火曜日は原道顕、木曜日は大学病院からの非常勤医師神吉智子が診療にあたっております。日常診療でこれら腎臓病を合併した患者様のコントロールに問題が生じた場合、お気軽にご相談ください。

原（はら）　道顕（みちあき）

非常勤医師（毎週火曜日）

山本（やまもと）　紗友梨（さゆり）

非常勤医師（毎週木曜日）

アレルギー外来

アレルギー外来を担当させていただいております、いでアレルギー・呼吸器クリニックの出口（いでぐち）です。アレルギー診療は一筋縄でいかないことが多く、患者様の診療を通して日々勉強させていただいています。例えば、血液検査の陽性・陰性とその患者様がアレルギーかどうかは必ずしも一致しません。乳児の採血をして卵白のIgEを測定すると多くのお子様が陽性ですが、実際には卵アレルギーではないことが多いです。また、感作部位と誘発症状が異なることがあることがとても興味深いです。最近では有名な話となっていますが、食物アレルギーは湿疹から始まるので、食物アレルギーの治療として、湿疹の治療をしなければなりません。他にも、クラゲに刺されて納豆アレルギーになったり、マダニに刺されて牛肉アレルギーになったり、魚アレルギーの原因も小児は魚、成人はアニサキスなど興味深いことが数多くあります。

このようなことから食物アレルギーの診断には経口食物負荷試験がスタンダードです。県内でも成人の食物アレルギーの負荷試験をおこなっている施設はほとんどありませんので、ご紹介いただけましたら幸いです。負荷試験は1泊2日の入院で施行させていただいております。

出口（いでぐち）　秀治（ひではる）

非常勤医師（第1・第3木曜日）
いでアレルギー・呼吸器クリニック
院長

小児科

当科は八代医療圏における小児医療の中核的な役割を担っており、圏内唯一の小児入院施設として主に二次救急医療に携わっています。外来では急性期の患者（主に感染症疾患）だけではなく神経疾患（てんかん、発達障害など）、腎泌尿器疾患（ネフローゼ症候群、慢性腎炎など）、内分泌疾患（成長ホルモン分泌不全性低身長症、甲状腺機能低下症など）、循環器疾患、血液疾患など多岐にわたる慢性疾患患者の治療に従事しています。また入院患者の多くを占めるのが感染症疾患であり、院内感染防止に気を遣いながら対応しています。

小児科診療では子どもの病気の診断や治療だけでなく、成長・発達の評価をもとに子どもが健康に育っていくための助言や支援を実践することが求められています。健診や病後外来で機嫌よく過ごす子ども達を診たり、病気や事故に対する予防法について母親へ啓蒙したり、育児についてのちょっとした質問に答えたりするのは、小児科医の大事な役割であり、その役割自体が大きな喜びでもあると私たちは実感しています。

子どもは自分の言葉で正確に訴えることができませんが、体調の良否を表情・活気・食欲・周囲への反応などで表現しています。症状が改善しない、原因がはっきりしない、何か気になる、など小児の診療でお悩みの際は当科へお気軽にご相談・ご紹介ください。

吉牟田 純一郎（よしむた じゅんいちろう）

小児科部長

日本小児科学会専門医

吉田 史則（よしだ ふみのり）

小児科副部長

日本小児科学会専門医

渡邉 聖（わたなべ ひじり）

小児科副部長

松石 芽衣（まついし めい）

小児科副部長

日本小児科学会専門医

永沼 節子（ながぬま せつこ）

非常勤医師（毎週月曜日）

日本小児科学会専門医

脳神経外科

脳神経外科では、脳出血やクモ膜下出血などの脳血管障害は従来の開頭手術、内視鏡手術、大学からの応援による血管内治療などを利用して治療可能です。また頭部外傷ではＩＣＰモニターを利用した重症例への対応も可能です。高齢者の認知機能低下につながる正常圧水頭症なども積極的に髄液シャント手術を進めていこうと思います。脳腫瘍に関しても、リニアックを利用した熊大で手術を済ませた患者受入なども考慮したいと思います。２人体制ですが、各科の先生方との連携を取りながら３６５日２４時間体制で頑張りますのでよろしくお願い申し上げます。

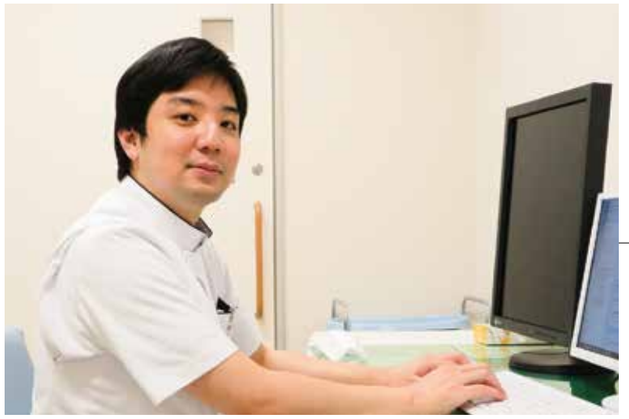
等 泰之（ひとし やすゆき）

院長補佐　脳神経外科部長

（兼勤労者脳卒中センター長）

日本脳神経外科学会指導医、

日本脳卒中学会専門医



泉 俊介（いずみ しゅんすけ）

脳神経外科医師

吉田 顯正（よしだ あきまさ）

脳神経外科医師

（兼リハビリテーション科医師）

日本脳神経外科学会専門医

血管内科

私が本院で心臓以外の血管（下肢動脈、鎖骨下動脈、腎動脈、その他静脈疾患）の診療を始めるようになって、19年目に突入致しました。この間カテーテル治療を施行した症例は述べ1900を超えました。これも日頃からの地域の先生方のご協力によるものと感謝申し上げます。今後もこれまでと同様に心臓血管外科の先生方ともしっかり連携を取りながら最善の治療法を選択し、適切な治療を提供してまいります。また本年も外来診療では、循環器内科外来との２診制により月曜日から金曜日まで、血管疾患にてご紹介いただいた患者さんに、毎日しっかりと対応いたします。

さらに昨年から毎週水曜日の足壊疽外来にて、東京大学や国立がん研究センター、杏林大学などで、多くの創傷治療に携わってこられたサキサカ病院 形成外科 匂坂正信先生に足壊疽班として活躍いただいています。当科へは下肢虚血をはじめとする、様々な原因でなかなか創傷が治らない患者さんが多く来院されますが、匂坂先生はこれまでの豊富な経験とその卓越した技術により、下肢や趾切断を覚悟した患者さんの足をたくさん救っていただいています。これからも匂坂先生を中心として、WOCナースの坂田舞さんや循環器内科および血管内科担当医師がチーム一丸となって、一人でも多くの患者さんの足を救うべく頑張っていきたいと思います。

土井（どい） 英樹（ひでき）

血管内科部長（兼循環器内科部長）

日本循環器学会専門医、
浅大腿動脈ステントグラフト実施医、
日本心血管インターベンション治療学会認定医

血管外科

腹部大動脈瘤はいったん破裂すると80～90%が死亡する危険な病態です。高齢者、心肺機能の低下などリスクの高い症例に対しても可能なステントグラフトによる治療を行っております。急性動脈閉塞は肢切断を要したり、術後虚血再灌流障害が起こったりと重篤な状態となる場合があります。血管内治療または外科治療により迅速に血管再建を行います。静脈瘤に対しては、硬化療法が外来療法可能ですし、短期入院のストリッピング手術に加え、血管内治療も導入しました。

原（はら） 正彦（まさひこ）

血管外科部長

日本外科学会専門医

心臓血管外科

当科では主に虚血性心疾患、弁膜症、心房細動などの不整脈、大動脈瘤や急性大動脈解離などの心臓大血管に対する外科的治療を行っており、安全性および確実性を考えた治療を心掛けています。ハイリスク症例では、人工心肺を用いない冠動脈バイパス術（オフポンプ心拍動下冠動脈バイパス術：ＯＰＣＡＢ）やステントグラフト内挿術（血管内治療）など低侵襲手術および通常の手術にこれらの低侵襲手術を組み合わせて行うハイブリッド手術（例えば、弓部大動脈瘤に対する弓部分枝再建を併施するステントグラフト内挿術など）にも積極的に取り組んでおり、ハイリスク症例や緊急症例に対しても合併症や死亡率の低下を図り、術後もＡＤＬが損なわれない様な治療を心掛けています。

心臓大血管疾患の手術適応、手術内容や手術のリスク（手術死亡率や合併症発生率など）、予後についてなどお気軽にご相談、ご紹介ください。

森山（もりやま） 周二（しゅうじ）

心臓血管外科部長
（兼心臓血管センター長）

三学会構成心臓血管外科専門医認定機構修練指導者、心臓血管外科専門医、日本胸部外科学会認定医、日本外科学会専門医・指導医・認定医

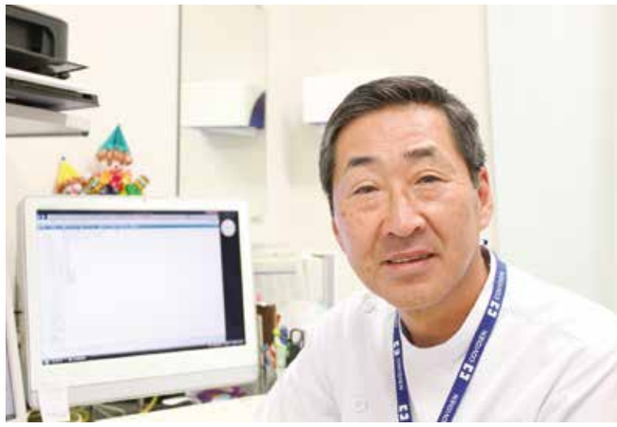
廣田（ひろた） 貴史（たかふみ）

心臓血管外科医師

中田（なかだ） 浩介（こうすけ）

心臓血管外科医師

形成外科



形成外科は主に先天的、後天的な変形等を形態的・機能的に修復・再建する外科であり、社会への適応を最終目的として診療を行っています。現在、一人体制のため、手術等はやや制限されますが、可能な限り対応したいと思います。

小倉（おぐら） 猛（たけし）

形成外科部長

日本形成外科学会専門医

消化器外科・一般外科

熊本県南の基幹病院として一般的な外科的疾患、救急医療はもちろんのこと常に進歩多様化するがん診療においても最新の知見が提供できることを基本としています。

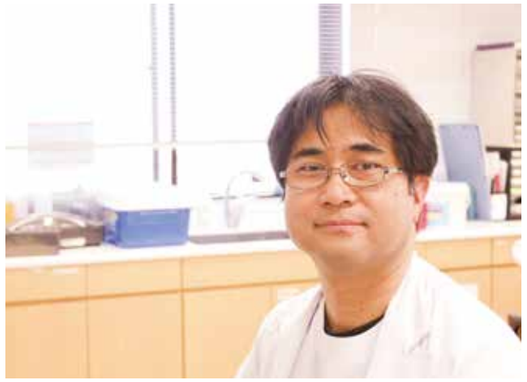
当院外科は消化器外科、乳腺外科、呼吸器外科、小児外科・移植外科の各領域の専門医を含む医師で構成されております。消化器外科の手術件数も増加傾向にあり、2021年度は457件の手術を行いました。当科では内視鏡外科手術にも力を注いでおり、胆石症、胆嚢炎のみならず、胃癌、大腸癌なども内視鏡下に手術を行っています。さらに手術のみならず術前術後の癌に対する化学療法、その後の緩和医療も含め、癌患者に対し全人的な医療を提供できるよう取り組んでおります。高齢化社会、核家族化に伴い患者本人をとりまく家庭環境も非常に厳しくなってきており、中央の医療機関とは違うバックアップができるのも熊本労災病院の強みの一つと考えています。

当科は日本外科学会、日本消化器外科学会の専門医修練施設として、一般診療のみならず研究、教育活動も行うように心がけています。

井上　光弘（いのうえ　みつひろ）

消化器外科部長

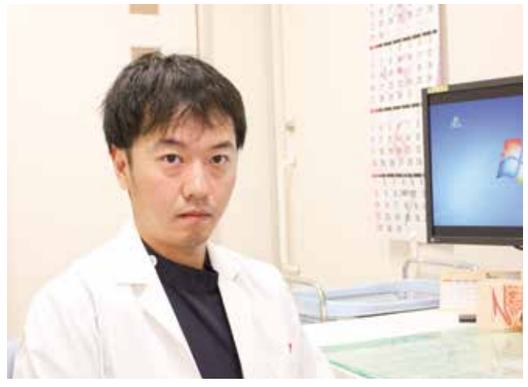
日本外科学会指導医・専門医、日本消化器外科学会指導医・専門医、日本消化器病学会専門医、日本内視鏡外科学会技術認定医、日本癌治療認定医機構認定医



飯坂　正義（いいざか　まさよし）

院長補佐　一般外科部長（兼救急･災害診療部長）

日本外科学会認定医、日本消化器外科学会専門医、消化器がん外科治療認定医、日本がん治療認定医機構認定医



辻　顕（つじ　あきら）

消化器外科副部長／一般外科副部長

日本外科学会専門医

森永　剛司（もりなが　たけし）

消化器外科医師

日本外科学会専門医、日本消化器外科学会専門医、消化器がん外科治療認定医、がん治療認定医

乳腺外科

乳腺に関する全般的な疾患（乳がん、良性腫瘍、乳腺炎、女性化乳房など）を扱います。とりわけ当院で乳房精査を行い、乳がんではなかった方については、乳がん啓蒙活動の一つとして乳がんのreal size 3D modelを供覧し、今後の乳がん検診普及と自己検診の意識向上に努めていきたいと考えています。また、開業医の先生方よりの紹介については、診療情報提供書を通じて、当院の診療内容が手に取るように理解していただけるように工夫しながら行っていきたいと思います。

林　裕倫（はやし　ひろのり）

乳腺外科部長 日本外科学会指導医、日本乳癌学会乳腺指導医

竹野　雅子（たけの　まさこ）

乳腺外科医師　非常勤医師

呼吸器外科

肺癌をはじめ、心臓・大血管および乳腺、脊椎以外の胸部の病変に対する手術を行っています。胸腔鏡を使用し、できるだけ低侵襲な手術を行うように努めています。特に肺癌に対しては、診断から手術、術前術後のリハビリ導入、術後の抗癌剤治療など、スムーズに治療を継続できるよう呼吸器内科、放射線科、病理診断科、リハビリテーション科と連携しています。

柴田　英克（しばた　ひでかつ）

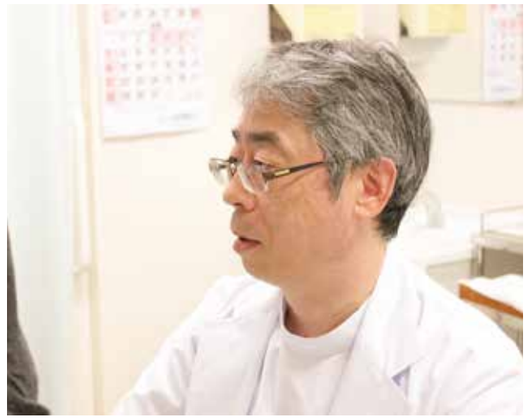
呼吸器外科部長

日本外科学会指導医、日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡指導医・評議員、日本呼吸器外科学会専門医・評議員、がん治療認定医、日本臨床細胞学会専門医

整形外科

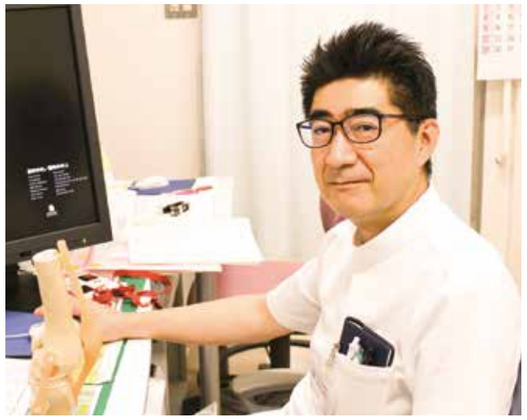
整形外科では、９名体制で診療を行っており各分野の専門医が在籍しております。脊椎外科（顕微鏡使用の除圧術や金属を併用した固定術など）、関節外科（人工関節や関節鏡視下手術など）、手外科、マイクロ、外傷（骨折や脱臼）に対する手術を多く行っています。

令和３年度は手術1，４８３例でした。救急・手術に力を入れており、時間外、緊急の場合にも対応しています。令和３年度、1日平均入院患者数８０．７人、1日外来患者数９６．２人、在院日数２０．３日でした。手術・救急対応重視の為、外来新患は救急と紹介患者とさせていただいています。地域医療機関の先生方には外来通院加療・救急入院転院加療など大変お世話になっております。



いけだ　たかし
池田　天史

副院長（兼脊椎センター長）
（救急・災害医療担当）（医事業務担当）
脊椎脊髄外科専門医・指導医、
日本整形外科学会専門医



みやざき　しんいち
宮崎　眞一

院長補佐　整形外科部長
(兼関節外科部長)
日本整形外科学会専門医、
日本リウマチ学会専門医

つちだ　とおる
土田　徹

手外科部長
日本整形外科学会専門医

かわぞえ　やすひろ
川添　泰弘

脊椎外科部長
脊椎脊髄外科専門医・指導医、
日本整形外科学会専門医

2021年度年間実績

- ■ 手術室での手術症例数　1,483例
- ■ 入院患者数　29,464人（1日平均 80.7人）
- ■ 外来患者数（延数）　24,352人（1日平均 100.6人）

ふたつやま　かつや
二山　勝也

整形外傷科部長
日本整形外科学会専門医

むとう　かずひこ
武藤　和彦

第二脊椎外科部長
日本整形外科学会専門医

かたやま　のぶひろ
片山　修浩

整形外科医師
日本整形外科学会専門医

ささおか　まさみつ
笹岡　眞光

整形外科医師
日本整形外科学会専門医

たなか
田中 みずほ

整形外科医師

小児外科・移植外科

小児外科では、新生児から概ね中学生くらいまでのお子さんの一般的な外科疾患を扱います。新生児を含めて、吐く、便秘、腹部膨満、腹痛、痔瘻や裂肛などおしりの異常、便に血が混じる、便の色が薄い、内臓や体表の腫瘍、でべそや異常な分泌物などのおへその問題、足の付け根が腫れる（鼠径ヘルニア＝いわゆる脱腸）、陰嚢に水がたまって腫れる（陰嚢水腫）など、なんでもご相談ください。

移植外科では、肝臓移植を主に、手術前の相談や、移植医療の実施、脳死移植施設への紹介、術後のフォローアップを行います。小児から成人までの重い肝臓病のかたの治療選択相談、あるいは大学病院などで肝臓移植を受けたあとのケアを希望される場合には気軽にご相談ください。

おおや　ゆうき
大矢　雄希

小児外科部長
（兼緩和ケア科部長）（兼医療安全管理室副室長）
日本外科学会専門医、日本小児外科学会専門医、
日本移植学会移植認定医

はやしだ　しんたろう
林田　信太郎

移植外科部長
日本外科学会専門医、日本移植学会移植認定医

いのまた　ゆきひろ
猪股　裕紀洋

院長
日本外科学会指導医、日本小児外科学会指導医、
日本消化器外科学会指導医、日本移植学会移植認定医、
社会医学系専門医

ありとめ　のりふみ
有留　法史

小児外科医師

皮膚科

皮膚科は医師３名で診療を行っています。

外来では、湿疹、真菌症、中毒疹などの一般皮膚疾患治療に加えて、皮膚腫瘍・皮下腫瘍の診断・小手術を行っています。入院では、帯状疱疹、蜂窩織炎といった感染症、全身性薬疹、皮膚良性および悪性腫瘍の治療を行っています。

患者様に良質な医療を提供できるよう努めてまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

じょうの　たかみつ
城野　剛充

皮膚科部長
日本皮膚科学会、難病指定医

おしかわ　ゆか
押川　由佳

皮膚科医師
日本皮膚科学会専門医

たなか　けんいちろう
田中　憲一郎

皮膚科医師
日本皮膚科学会認定医

泌尿器科

4月より今藤淳之助先生が新たに加わり、宮本、中村合わせて３名で診療を行っています。

泌尿器科では、悪性腫瘍、排尿障害を中心に泌尿器科全般の診療を行っています。悪性腫瘍では腎癌、腎盂尿管癌、膀胱癌、前立腺癌などが中心で、早期診断、早期治療および手術、放射線科治療、化学療法を併用した集学的治療により癌制圧に取り組んでいます。

また、進行癌の場合であってもがん化学療法においては最新の分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬なども積極的に治療に取り入れ、患者さんのＱＯＬを維持しながら予後の改善に取り組んでいます。かかりつけ患者様の年1回のＰＳＡ測定をこの場を借りてよろしくお願い申し上げます。排尿障害もまずは薬物療法を行い、無効例には主に内視鏡による手術を施行します。当院では安全な手術をモットーに、高齢者であってもカテーテルフリー、ＱＯＬ向上を目指して積極的に手術を行っています。尿路結石に対しても最新のレーザー機器を用いた経尿道的砕石術を行い、ほとんどの症例において一回の治療で結石の消失がみられています。

小児に対しても積極的に手術を行います。例えば、小児の停留精巣は年間１０数例程度ですが、この１０数年一定数を維持していることから八代圏では手術適応となる患児がこの程度存在するという証です。小児科の先生方にもこの場を借りて御紹介お願い申し上げます。

「小児から高齢者まで疾患を問わず八代で治療を完治させる」を目標に診療を行っていきますので、いつでもお気軽にご相談ください。

宮本（みやもと）　豊（ゆたか）

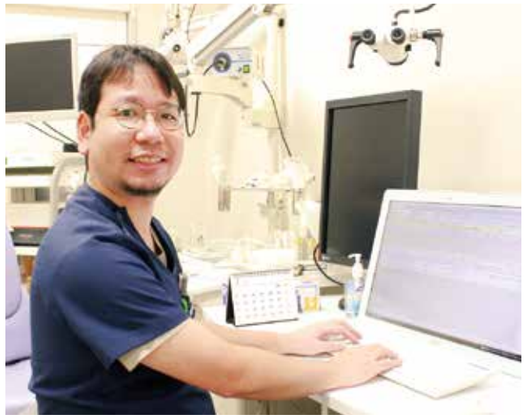
泌尿器科部長

日本泌尿器科学会指導医

中村（なかむら）　圭輔（けいすけ）

第二泌尿器科部長

日本泌尿器科学会指導医



今藤（いまふじ）　淳之助（じゅんのすけ）

泌尿器科医師

産婦人科

当院産婦人科は、今年度、婦人科腫瘍専門医である福松之敦が新たに副院長兼産婦人科部長として赴任しました。昨年度は婦人科疾患の手術症例数を制限して加えていましたが、今年度から積極的に手術を再開していきます。

手術は主に子宮筋腫、卵巣腫瘍などに対して開腹手術や腹腔鏡下手術を行っています。また婦人科悪性腫瘍に対してもリンパ節郭清術を含む手術療法や化学療法、放射線科との共診による放射線療法を行っています。

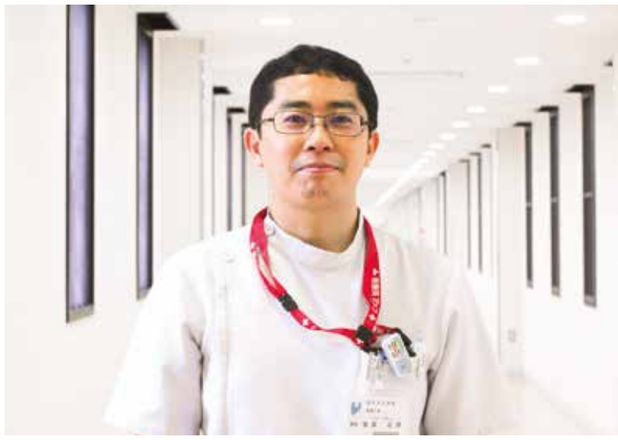
周産期医療については、県南の基幹病院として八代圏内だけでなく、宇城圏域、球磨圏域、芦北圏域からの症例にも対応し、他科との連携により様々な合併症妊娠の管理を行います。また当院には新生児集中治療室はありませんが、小児科との連携により切迫早産の入院管理、妊娠34週以降で人工呼吸器管理の必要がないと予想される早産に対応します。

福松（ふくまつ）　之敦（ゆきとし）

副院長

（兼産婦人科部長）

日本産科産婦人科学会認定産婦人科専門医・指導医、日本婦人科腫瘍学会認定婦人科腫瘍専門医・指導医、日本がん検診・診断学会がん検診認定医



値賀（ちが）　正彦（まさひこ）

第二産婦人科部長

日本産科婦人科学会認定産婦人科専門医・指導医

蛯原（えびはら）　優花（ゆうか）

産婦人科医師

耳鼻咽喉科

耳鼻咽喉科は２０１５年４月より常勤医1名で診療を再開いたしました。その後２０１６年5月より2名、２０１９年10月より３名に増員となり、より充実した診療が行えるようになりました。

耳鼻咽喉科は耳、鼻、口腔、咽頭、喉頭、頸部と広い領域を扱う診療科です。取り扱う疾患も中耳炎、副鼻腔炎、扁桃炎などの炎症性疾患、アレルギー性鼻炎等の免疫疾患、難聴やめまい、嗅覚障害、味覚障害、顔面神経麻痺などの感覚器・神経障害、音声や嚥下などの機能障害、睡眠時無呼吸症候群、悪性腫瘍を含む頭頸部領域の腫瘍性疾患等、多岐にわたる疾患を診察、治療しています。

当科ではほとんどの耳鼻咽喉科疾患の検査、治療を当院で完結できるように対応しております。また高次医療機関での治療が必要と判断した場合は、熊大病院等を紹介させていただいております。まずはご相談ください。

増田　聖子（ますだ　まさこ）

耳鼻咽喉科部長

日本耳鼻咽喉科学会専門医・指導医、日本気管食道科学会専門医、日本耳鼻咽喉科学会補聴器相談医、日本耳鼻咽喉科学会補聴器キーパーソン、日本めまい平衡医学会認定めまい相談医、日本職業・災害医学会認定労災補償指導医

植田　寛之（うえだ　ひろゆき）

耳鼻咽喉科医師

村上　瑛（あきら）

耳鼻咽喉科医師

外来診療予定表

	月	火	水	木	金
午前	一般外来	一般外来	一般外来	一般外来 専門外来	手術
午後	専門外来	手術		専門外来	手術

専門外来について（まず一般外来で診察を行い、必要な方を予約制で行っています。）

補聴器・耳鳴外来：第1/3/5月曜午後、毎週木曜午前　嚥下機能検査：毎週木曜午後　めまい検査外来：毎週月曜午後

放射線科

現在の医療においては、的確な診断を行うために画像診断は必要不可欠な手段であり、熊本労災病院では放射線科常勤医４名で業務にあたっています。また日本放射線科学会が定める放射線科専門医研修期機関に認定されており、後進の放射線科医や臨床研修医の指導に力を注いでいます。

平成２８年４月以来、既存の３．０Ｔ　ＭＲＩ装置に加え、１．５Ｔ　ＭＲＩ装置を導入し、予約待ち日の大幅短縮および検査のニーズに合わせたＭＲ画像の提供ができる体制となりました。

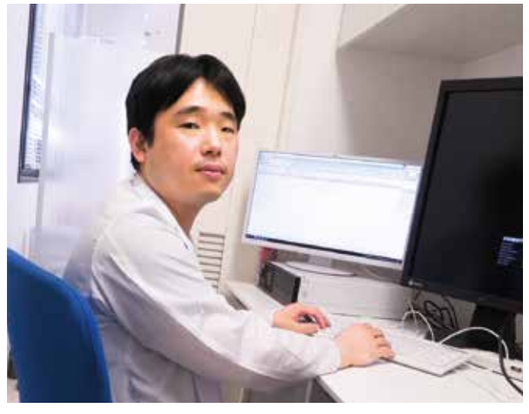
また、平成２９年1月より熊本県初の2管球ＣＴが稼動しています。国内でも最高峰レベルのＣＴ装置ですので、熊本県南地区をはじめ医療圏ニーズに応えられるような画像提供を、更には研究部門でもその力を発揮すると期待しています。お困りの症例などありましたら是非ご紹介ください。

荒木　裕至（あらき　ゆうし）

院長補佐　放射線科部長

（兼中央診療部統括部長）（兼医療情報部長）

日本医学放射線学会研修指導者、
日本医学放射線学会放射線診断専門医



横田　康宏（よこた　やすひろ）

放射線科副部長

日本医学放射線学会放射線診断専門医

井上　泰平（いのうえ　たいへい）

放射線科副部長

日本医学放射線学会放射線診断専門医

森口　直哉（もりぐち　なおや）

放射線科医師

麻酔科

　手術件数増加で、当院の年間麻酔科管理症例は約2，800例を超えるようになりました。手術室内での麻酔業務をこなすことで精いっぱいの状況が続いており、現在ペインクリニックは休診しております。
　「断らない麻酔」を心掛けていますが、術前診察時に全身状態改善のため、あるいは追加検査を行うため手術を延期した方がよい患者様を見つけることも、麻酔科の重要な役割と考えます。どうぞご理解ください。
　各科と協力しながら安全な麻酔を目標とし、高度かつ質の高い医療を提供できるよう努めてまいりたいと思います。

なりまつ　のりこ
成松　紀子

麻酔科部長
（兼集中治療部長）（麻酔科標榜医）
日本麻酔科学会認定指導医、
日本専門医機構認定麻酔科専門医、
日本集中治療医学会専門医、
日本救急医学会専門医、
Infection Control Doctor(ICD)、
日本 DMAT 隊員（統括）

やまべ　のりひさ
山部　典久

第二麻酔科部長
（兼中央手術部長）（麻酔科標榜医）
日本麻酔科学会認定指導医、
日本専門医機構認定麻酔科専門医

なかしま　けん
中嶋　健

第三麻酔科部長
（麻酔科標榜医）
日本麻酔科学会専門医

なかむら　たかひで
中村　孝英

麻酔科医師
日本麻酔科学会認定医

たなか　しょうへい
田中　祥平

麻酔科医師

ささおか　みゆき
笹岡　美有希

麻酔科医師

眼科

　眼科は平成28年1月より当院眼科の常勤医勤務が再開となり、平成31年4月からは常勤医2名で診療しています。平日午前に一般外来を行い、月曜・木曜の午後は手術、火曜・水曜・金曜の午後はレーザー治療、硝子体内注射、外来手術、眼底造影検査、術前検査など特殊検査・処置を行っています。また、令和元年の10月から、視能訓練士が常勤となり、複視や斜視・弱視の検査も行っています。当科では、常勤医勤務の再開後は白内障手術を増やしていっているところです。
　可能な限り多様な疾患に対応したいと思いますので、まずはご相談ください。今後ともよろしくお願い申し上げます。

いりえ　あんな
入江　杏菜

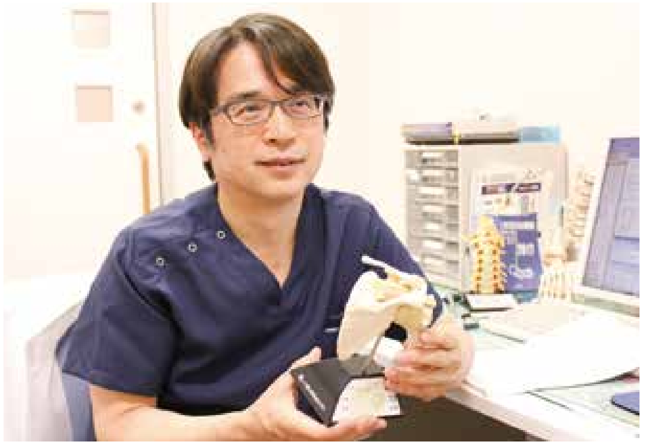
眼科副部長

よしずみ　はなこ
吉積　華子

眼科医師

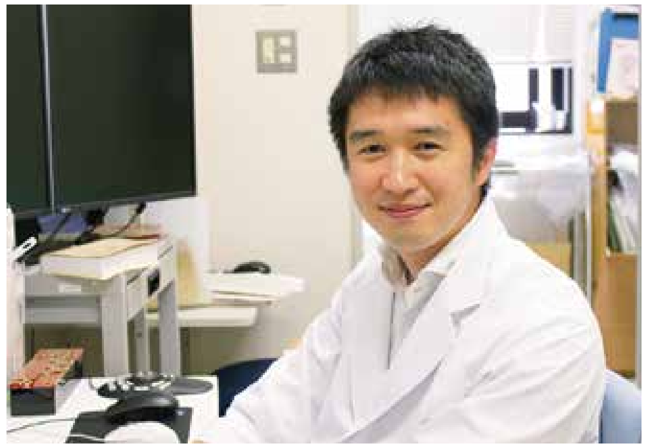
リウマチ内科／リウマチ・膠原病内科

　関節リウマチは効果的な治療薬であるＭＴＸや生物学的製剤などが積極的に使われるようになり、早期診断治療により良好な疾患コントロールも可能となってきました。少しでもお役に立てればと思います。



やまむら　ゆうじ
山村　雄治

リウマチ科医師
浜田呼吸器科内科クリニック／リウマチ科
日本リウマチ学会専門医（評議員）、ICD 認定医、
【所属学会】日本シェーグレン症候群学会等

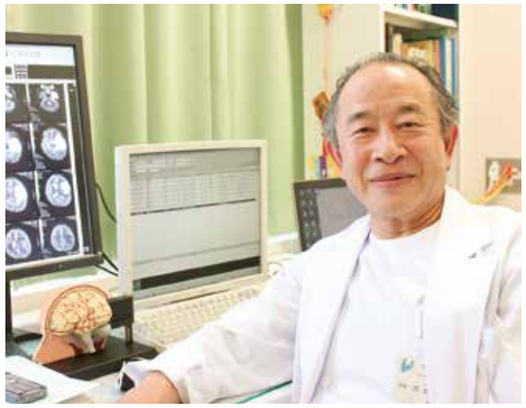


さかた　やすあき
坂田　康明

リウマチ・膠原病内科
非常勤医師（第2・4水曜日）

リハビリテーション科

当科は当院入院中の患者様に対しリハビリテーションを行っています。
高齢化に伴い、元々の病気の状態が不安定になったり、合併症が増えて不自由になり、日常生活で配慮や調整が必要となったりする場合があります。そういったときに、リハビリテーションの検査や治療で、介護される方だけでなく介護する方も安全で安楽な暮らしができるように取り組んでおります。



松村　直樹（まつむら　なおき）

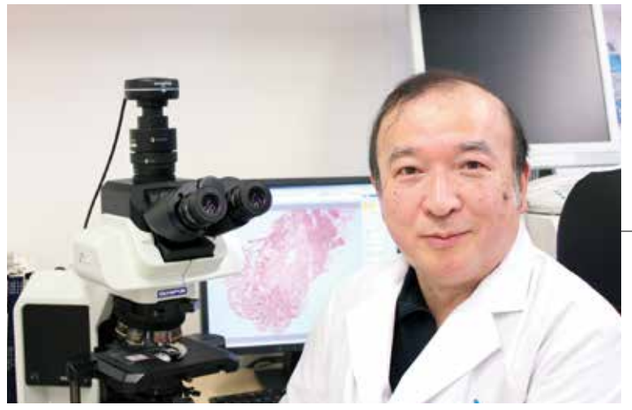
リハビリテーション科部長
日本リハビリテーション医学会認定医

吉田　顯正（よしだ　あきまさ）

リハビリテーション科医師（兼脳神経外科医師）
日本脳神経外科学会専門医

病理診断科

当科は熊本県南の中核病院における病理診断部門であり、質の高い医療を支援するために、組織診断、細胞診断、術中迅速診断、病理解剖を行っています。近隣の医療機関からの生検などの診断も行っています。病理解剖の結果はＣＰＣを行い、臨床の向上に役立てられています。電子カルテや病理診断支援システムの導入により、マクロ、ミクロの情報を併せた病理診断の報告を行っています。術中迅速診断では、手術中に病変の組織診断や断端の判定などを行い、常勤病理医のいるメリットを最大限にいかしています。自動免疫染色装置の導入により、乳癌や胃癌におけるＨＥＲ２（IHC）、悪性リンパ腫や軟部腫瘍などに関連した、さまざまな免疫染色を院内で迅速に行い、より精度の高い病理診断に寄与しています。



栗脇　一三（くりわき　かずみ）

病理診断科部長
（兼検査科部長）
日本病理学会研修指導医、
日本臨床細胞学会認定細胞診専門医

臨床研修医

当院は、多診療科を有する地域の中核病院として、救急医療、がん治療、小児周産期医療など豊富で幅広い症例を背景に、初期研修医に対して、チーム医療の中で、医療の基礎知識、総合的診断能力や基礎的医療技術の修得を目指した研修を実施しています。研修医の自主性が尊重される研修システムであり、積極性のある研修医は臨床経験も豊富となり、大きな伸びが期待できます。また、「何を与えられたいか」ではなく「何を学びたいか」という研修医の自主性を重んじ、一人一人に対し、マンツーマンのきめ細やかな、実践主義の指導を心掛けています。
研修医には、年間を通して週に1回各上級医による早朝講義を実施しているほか、月に1回は経験症例発表会を開催しており、終了後には上級医を含めたみんなで病院提供のカレーを食す『カレーの会』として親しまれています。また、当院は卒後臨床研修評価機構（略称JCEP）より、2022年1月18日評価委員会で認定証発行が承認されました。JCEPは、国民に対する医療の質の改善と向上をめざすため、臨床研修病院における研修プログラムの評価や人材育成等を行い、公益の増進に寄与することを目的とし設立されました。書面による調査と訪問による調査（実地訪問）により評価が行われます。
今後も、臨床研修病院として研修医の育成に努めていきます。

1年次 研修医

後列左から：田上 慧（たのうえ さとし）（基幹型）、甲斐 智恭（かい ともの り）（基幹型）、田畑 遼（たばた りょう）（基幹型）、德永 成晃（とくなが しげあき）（基幹型）
前列左から：塚本 尚紀（つかもと なおき）（基幹型）、持田 香織（もちだ かおり）（基幹型）、隈部 光（くまべ ひかる）（基幹型）、吉岡 幸英（よしおか ゆきひら）（基幹型）

2年次 研修医

後列左から：簑島 弘（みのしま ひろし）（基幹型）、髙田 遼（たかだ りょう）（基幹型）、牧田 真之（まきた まさし）（基幹型）、寺尾 孟将（てらお たけまさ）（協力型）、松田 崇秀（まつだ たかひで）（基幹型）
前列左から：宮城 大智（みやぎ だいち）（基幹型）、宮﨑 真衣（みやざき まい）（基幹型）、安倍 悠乃（あべ ゆうの）（基幹型）、松岡 亮佑（まつおか りょうすけ）（基幹型）

看護部

当院は、熊本県南の公的中核病院として、救急医療・がん治療・災害医療等に積極的に取り組んでいます。近年、患者さんの高齢化に加え、短い入院期間内で集約された医療や看護サービスが求められています。当院は全職員が力を合わせ、チーム力を発揮し良質で信頼される医療の実践を目指しています。そして、看護部は「病院の理念と倫理に基づき患者さんに寄り添い満足して頂ける看護を提供します」を理念としております。看護職は、日々のケアを通して患者さんの心にふれ、心に寄り添い、心に残るような看護を実践していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

葉玉（はだま） 博子（ひろこ）
看護部長
認定看護管理者

坂上（さかうえ） 和江（かずえ）
看護副部長

荒川（あらかわ） 直美（なおみ）
看護副部長

看護部理念

病院理念と職業倫理に基づき患者に寄り添い満足して頂ける看護を提供します。

看護部 基本方針

1 社会情勢や医療の進歩に即応し、安全で安心して頂ける質の良い看護サービスを効率的に提供する
2 インフォームドコンセントをもとに自己決定を支える看護を提供する
3 急性期医療・地域医療推進の中、医療チームの一員としての職務を果たせるように看護実践能力を高める
4 専門職業人として、質の高い看護を目指し自己研鑽に努める

認定看護師・特定認定看護師・特定看護師

岡山（おかやま） 浩子（ひろこ）
緩和ケア認定看護師

宮川（みやがわ） 亜希子（あきこ）
緩和ケア認定看護師

本山（もとやま） 詔誇（しょうこ）
糖尿病看護認定看護師

和久田（わくだ） 容子（ようこ）
感染管理認定看護師

水町（みずまち） 広恵（ひろえ）
脳卒中リハビリテーション看護認定看護師

田中（たなか） 孝樹（こうき）
脳卒中リハビリテーション看護認定看護師

坂田（さかた） 舞（まい）
皮膚・排泄ケア認定看護師

菅原（すがわら） 真澄（ますみ）
呼吸器疾患看護特定認定看護師

梅田（うめだ） 知寿子（ちずこ）
がん化学療法看護認定看護師

寺瀬（てらせ） 真利子（まりこ）
クリティカルケア特定認定看護師

柿本（かきもと） 里美（さとみ）
認知症看護認定看護師

上淵（うえぶち） 恵子（けいこ）
認知症看護認定看護師

- **認定看護師**
  緩和ケア認定看護師／2名、糖尿病看護認定看護師／1名、感染管理認定看護師／1名、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師／2名、皮膚・排泄ケア認定看護師／1名、がん化学療法看護認定看護師／1名、認知症看護認定看護師／2名　計10名
- **特定認定看護師（特定行為研修を修了した認定看護師）**
  呼吸器疾患看護特定認定看護師／1名、特定ケア認定看護師／1名　計2名
- **特定看護師（特定行為研修を修了した看護師）**
  救急集中領域2名

薬剤部

薬剤部長
谷口（たにぐち） 一成（かずなり）

薬剤部では、患者さまのアドヒアランス向上と副作用の防止を図るために、服薬や薬の注意点などの説明を入院患者さま中心に行っています。また、安全で適正に医薬品を使用するために、医療従事者や患者さま・患者さま御家族へ、薬に関する情報を提供しています。現在、感染、糖尿病、栄養、がん、緩和などのチームの一員としても活動しています。医療が多様化・複雑化する中、安心できる医療の提供のため、より専門的な知識を備える必要があり、薬剤部でも認定・専門薬剤師の資格修得を推進し資格修得者も増えてきました。今後も患者さまへより良い治療が行われるために、医薬品適正使用の支援に努めてまいりますのでよろしくお願いいたします。

中央リハビリテーション部

中央リハビリテーション部長
岡元（おかもと） 進一（しんいち）

中央リハビリテーション部では、理学療法士17名，作業療法士８名，言語聴覚士４名，リハ助手３名の計３２名で業務に取り組んでいます。整形外科疾患や脳血管疾患をはじめ、各種疾患に対して、入院早期，手術直後から介入しています。また、心疾患やがんのリハビリテーションに関しては、必要な資格や研修を受講した専門の療法士が実施しています。その他に、政策医療として職業復帰のための復職支援や、勤労者予防医療活動も実施しています。

地域活動としては、県から委託されている『八代地域リハビリテーション広域支援センター』として、圏域でのリハビリテーション従事者や地域の方々を対象とした研修会の開催や現地に出向いての相談対応など、地域に密着した医療・知識・技術の提供に積極的に取り組んでいます。

中央放射線部

中央放射線部長　橋口（はしぐち） 和博（かずひろ）

中央放射線部は19名の技師がおりそのうち４名は今年度採用者です。

2管球ＣＴ、ＭＲＩ（3.0T）を含め23台の放射線撮影機器を取り扱っております。放射線科部長、荒木裕至先生をはじめ放射線科の先生方と連携し、撮影から画像診断まで速やかに行えるよう心掛けています。中央放射線部ではこれからも撮影技術を高める努力を重ね、信頼できる画像の提供を目指していきたいと考えていますので、連携医療機関の先生方におかれましては、今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。

中央検査部

中央検査部長　篠原（しのはら） 弘文（ひろふみ）

中央検査部には、30名の臨床検査技師（正規22名、嘱託3名、定年後再雇用5名）と2名の検査助手（障がい者雇用）が在籍しています。

日々の検査業務は勿論のこと、学会発表や研修会への講師派遣等、学術的な活動も積極的に行い、細胞検査士、超音波検査士、感染制御認定臨床微生物検査技師等の学会認定資格も多数の技師が取得して、高度で専門的な診療支援を行っています。また、ICTやNST、糖尿病教室の運営等チーム医療にも貢献しています。

生理検査部門には、最新のハイエンド超音波検査機器を多数整備し、心臓・腹部・血管・乳腺・表在領域の質の高い画像診断に貢献しています。また、労災病院の特色である振動障害検診を毎年、熊本・鹿児島県内に出張して行っています。検体検査部門は、昨年10月に検査機器を一新し、最新の高精度な自動化機器を導入し、迅速且つ信頼性の高いデータを報告しています。また毎年、日本医師会、日臨技、熊臨技の外部精度管理も受審し、精度保証認証施設として認定も受けています。微生物検査部門は、県南地区の感染制御の中心的役割を担っており、県内では当院を含め５施設しかない研修施設認定も受けています。CIVID-19対応として、LAMP、RT-PCR、リアルタイムPCRの3法を駆使し効率的で信頼度の高い診断に寄与しています。病理部門では、術中迅速診断や多項目の免疫染色や特殊染色を院内実施し、迅速かつ質の高い病理診断に努めています。また、抗悪性腫瘍剤や免疫チェックポイント阻害剤へのコンパニオン診断や迅速オンサイト細胞診（ROSE）への対応を行い、適切な治療と患者負担軽減に貢献しています。

中央検査部は、これからも臨床検査センター長の吉田顯正先生と栗脇一三臨床検査科部長（病理診断科部長兼務）の下、スタッフ一丸となり、地域一番の検査部を目指して益々質の高い診療に貢献していきますので、連携医療機関の先生方におかれましては引き続き御厚誼を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

栄養管理部・栄養管理室

栄養管理室長
藤井（ふじい） しのぶ

栄養管理部では、患者さまの栄養改善、病状改善について、「食」の専門性を活かし、各医療スタッフと連携しながら取り組んでいます。

入院患者様には、衛生管理を徹底し、安心安全で喜んでいただける食事の提供を行い、食事サービス面においては、毎日の朝食の選択メニューに加え、年間４３回の行事食を提供し、中でも治療や疾患で食事摂取量が低下されている患者さまに対し、直接聞き取りを行いながら食事を提供するハート食（ハートフル食）は、患者さまに喜んでいただいています。また、入院・外来の患者さまに対し、肥満、糖尿病、循環器疾患、消化器疾患、癌、嚥下障害、アレルギー疾患など、医師の指示のもと個人指導・集団指導を実施しています。チーム医療では、ＮＳＴや緩和ケア、褥瘡チームに参画し、各医療スタッフとともに積極的な栄養改善に努めています。

栄養指導は毎日実施しております。ご要望などございましたら、お気軽に御相談、御紹介ください。

中央臨床工学部

中央臨床工学部長
植田（うえだ） 公昭（きみあき）

中央臨床工学部では、医師の指示の下、人工心肺装置や血液浄化装置などの生命維持管理装置の操作・保守・点検を行うことを主な業務としています。患者さまの治療・検査に関わる「臨床技術提供業務」、生命維持管理装置を含む医療機器を安全に使用するための「医療機器保守管理業務」を行っています。業務内容が多岐にわたるため、複数の診療科の医師、看護師、その他医療スタッフ、事務職員の方々と協力し、患者さまへより良い医療を提供できるように日々の業務に取り組んでいます。

入退院支援センター

目　的

入院前から患者・家族が入院生活をイメージできるとともに、患者の身体的・精神的・社会的背景を把握し、退院後の生活を想定して院内外の多職種が連携し「切れ目のない支援」を提供する。

目　標

1. 患者・家族が入院に対する不安がなく生活できるようにする。
2. 在宅復帰に向けた問題点を早期に発見し、患者・家族と共に解決できるように支援する。
3. 多職種（医師・病棟看護師・外来看護師・退院調整部門・医療ソーシャルワーカー・介護支援専門員・保健師・薬剤師・管理栄養士・リハビリ部門・事務等）と連携し、より専門的支援ができる。
4. 地域の医療機関・施設・介護事業所等との連携や社会資源の活用を行い、患者の療養環境を整える。

入退院支援センターでは、入院支援看護師４名、入院支援事務員３名で対応しています。入院支援看護師は、入院前に「身体的・精神的・社会的背景を含めた患者情報の把握」「入院前に利用していた介護サービス又は福祉サービスの把握」「褥瘡に関する危険因子の評価」「栄養状態の評価」「服薬中の薬剤の確認」「退院困難な要因の有無の評価」「入院中に行われる治療・検査の説明」「入院生活の説明」などを行います。入院支援事務員は、入院手続きに必要な書類の説明と入院案内、医療限度額適用・標準負担額認定証の手続きに対する説明、事務処理を行います。

入院支援看護師の具体的な支援内容は、入院・術前オリエンテーション・呼吸訓練指導・禁煙指導・栄養指導・休薬指導・口腔問題の確認及び口腔ケアの必要性に関する説明並びに医科歯科連携の手続き等です。患者に応じた支援を行い、スムーズな入院に結び付けています。また、病棟や外来と連携を図り看護の継続ができるように努め、必要に応じて多職種と連携しています。

● 入院支援をすることでの患者さまの利点

入退院支援センターであらかじめ説明を受けていれば、退院までにどのような治療プロセスをたどり、準備が必要なのかを話し合うことができ、心構えもできます。また、患者・家族の不安や予測される問題に対して早期から多職種協働をすることで、安全・安楽な入院生活を送ることにも繋がります。

地域医療連携部・地域医療連携室

相談支援・退院支援・両立支援部門

地域医療連携室では、退院調整看護師４名、医療ソーシャルワーカー４名の計８名で、病棟担当制により業務にあたっています。なお、３名が医療ソーシャルワーカーが両立支援コーディネーターの資格を有しており、機構の大きな使命のひとつである治療と就労の両立支援にも積極的に取り組んでおります。どうぞお気軽にご相談ください。

- 入退院等に関わる各種ご相談・ご支援
- 医療機関・介護保険事業所との連携
- 各種社会福祉制度のご相談
- 治療と就労の両立についてのご支援

前列左から：楠本舞衣子　退院支援看護師　担当：西５病棟
山本　彩乃　退院支援看護師　担当：東５病棟
久保田聖美　医療ソーシャルワーカー（社会福祉士）　担当：西４病棟
椛谷　豊　医療ソーシャルワーカー（社会福祉士）　相談支援部門
後列左から：村田　真美　退院支援看護師　担当：西３病棟
鷲見　美鈴　退院支援看護師　担当：中央３病棟
鎌田　あや　医療ソーシャルワーカー（社会福祉士）　担当：中央４病棟
中村麻衣子　医療ソーシャルワーカー　担当：東４病棟

松村　敏幸

副院長（兼治療就労両立支援部長）（兼地域医療連携室長）（兼労災疾病研究室長）
（兼熊本労災看護専門学校長）（兼臨床研修センター長）（教育・研修担当）

事務部門

事務が４名在籍しております。地域医療連携室では、地域医療機関、市町村行政機関及び介護保険事業所・施設等との連携窓口として、患者様の転院・在宅復帰支援、社会資源の情報提供、各種相談など幅広い業務を担っています。今後とも、これまで以上に密な連携を取り、地域と病院との架け橋となれるよう心掛けてまいります。
地域医療機関の先生方、患者様をはじめ、たくさんの方々に気軽にご利用いただけるよう努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

- 紹介患者様の初診及び放射線科検査予約取得
  再診のご連絡の場合は直接、外来（14時以降）へご連絡ください
- 紹介状・返書の管理
  お返事が遅れている場合は恐れ入りますがご連絡ください
- 行政機関および地域医療機関等との連絡・調整
- その他よろず問合せ

どこに問い合わせたらいいか分からない…そのような時は一先ずお気軽にお電話ください。

問い合わせについて

病院代表電話　0965-33-4151

※救急患者に関する連絡はこちらへお願いします。

地域医療連携室 直通ファックス　0965-34-5799

放射線科検査予約 専用直通電話　0965-33-7227

検査方法の詳細につきましては病院ＨＰ：「医療関係の方へ」→「患者紹介」をご覧ください。

入退院支援・相談窓口 専用直通電話　0965-33-7231

退院調整、相談支援、両立支援に関するご用件の際にご利用ください。

独立行政法人 労働者健康安全機構
熊本労災病院
〒866-8533 熊本県八代市竹原町1670
TEL 0965-33-4151 FAX 0965-32-4405

HP

フェイスブック
熊本労災病院公式

https://www.kumamotoh.johas.go.jp

2022.9